

平成27年度 北杜市立 高根中学校 校内研究の概要

1 平成26年度の研究を受けて

本年度は、「複数年計画で『教えて考えさせる授業づくり』に取り組んできた3年目」に当たる。

「確かな学力の育成」「学力の向上をめざして」平成25年度より研究を進めている。

1年目である25年度は、鏑木先生を招聘し、国語科の（盆土産）文学作品を題材に師範授業を参観させていただいた。また、研究授業、学習会を通して、「教えて考えさせる授業」の特性や流れについての認識を深めた。

2年目である26年度は、「教えて考えさせる授業」の「流れ＝展開」を再確認した上で、各教科で、その「流れ＝展開」を取り入れた授業の実践を積み重ねた。

「教えて考えさせる授業」とは、東京大学の市川伸一教授によって提唱された「習得」を重視した授業法の一つ。

基本的には「教師からの説明」→「理解確認」→「理解深化」→「自己評価」の4段階から構成される。学んだ内容が「本当に分ったのか」「あやふやなのかをはっきりさせること」を大事にしている。

- ① 予習、予習内容の確認、教師による補説等による基礎的な知識や技能の定着を図る。
- ② 「事物の本質をとらえるための思考・判断・表現」の場面を設け、個々の理解の様子を確認し、明確にする。
- ③ 学習事項を活用し、発展的な課題を解決することで、学習内容の本質に迫り、理解の深化を狙う。
- ④ 「何がどのように、どの段階まで理解できたのか、また、できなかったのか…」等、理解度を学習者が評価する場面を設定し、子ども達の認識力を育てるとともに、授業者がその後の授業をどう展開していくかを考えるために活用する。

また、この「教えて考えさせる授業」は、基本的には…

- ① 「学習が得意ではない生徒が、基礎的な知識・技能を身につけて高度な課題解決に参加できる」学習のスタイルである。
- ② 「学習が得意な生徒や先取り学習している生徒が達成感・充実感が味わえる」学習のスタイルである。

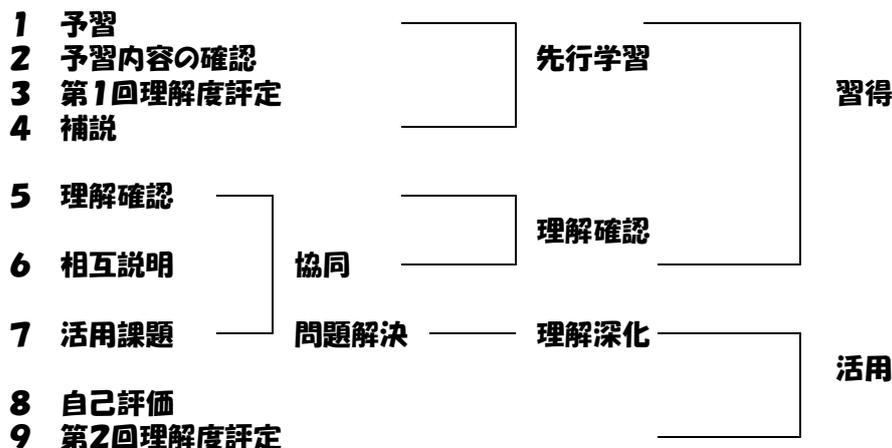
研究を重ねる度に、成果と課題が明確になってきている。「教えて考えさせる授業の流れやメリットは理解することができた。しかし、個々の学力の格差や基礎基本の力の未定着…等の問題もあり、「理解確認」の段階に時間がかかりすぎてしまい、1時間の授業の中で「活用課題」に取り組む時間を充分にとれなかった…」という声が多かった。この点の解決を本年度の研究の中心に置きたいと考えている。

2 平成27年度の校内研究の方針

本年度は昨年度の研究を基盤に、「理論に裏付けられた実践」「昨年度までの研究で明確になった課題を解決する研究」を重ねる中で、本研究の「目的」である「学力の向上を目指していきたい。また、この研究が、私たち教師にとって、教育活動の幅を広げるものになることを期待する。

「昨年度までの研究」を引き継ぐとは、具体的には、下記の流れをもった『教えて考

えさせる授業』の展開を引き継ぐことである。そして、2年間の研究の中で明確になった成果と課題とを考慮し、「楠木流の教えて考えさせる授業」を「高根中学校の教育活動に即した教えて考える授業」に育てていきたいと考える。



3 研究主題と研究仮説

(1) 高根中学校の生徒の実態より

高根中学校の生徒は…

- 真面目で、指示に従うことができる。
- 継続的な指導により「習慣」を育てることができる。
- ▼家庭学習の習慣が未定着で、保護者の不安が大きい。
- 多くの生徒が「責任」を背負う立場にあり、よく考え、人前で表現する機会が多い生徒も少なくない。
- 男女間の隔たりが少なく、仲が良い。
- ▼おしゃべり・会話は好きである。対話の中で考えを深めることが苦手。
- ▼真面目で素直な反面、思考し、自分の考えを深めることを好まない。
- ▼基礎・基本の力が劣るわけではないが、曖昧な点を含むために、自分自身に自信を持ってない生徒が多い。

(2) 本年度の研究で目指すもの

本年度の研究で目指すべきは…

- (1) 対話の中で「自分自身の考えを説明すること、相手の説明を受け入れることで、自分自身の認識の曖昧さを自覚し、理解を深める」ことで、**確かな基礎的な知識・技能の力を育てる。**
- (2) 説明できる段階まで高まった**基礎基本の力**をもって、発展的な課題を解決する**思考力を育てる。**

ここで言う「対話」とは…

「会話」は、お互いのコミュニケーションをとること自体が目的であったり、話す内容が特に限定されていなかったりする場合が多い。基本的には、「知っている者同士が、もしくは、共通の理解がある内容についての言葉のやりとり」である。新しい知識や発見を生み出すものではない。しかし、**学びの場（教室）においては、会話ができる安心感が重要である。**

「対話」は、ある目的なりテーマをめぐってのコミュニケーション。何か具体的な問題があつて、結論を出すためのものである。あまり親しくない人同士の価値や情報の交換。あるいは親しい人同士でも、**価値観が異なるときに起こるその摺り合わせ**であり、**新しい知識を生み出すことができる活動ある。**

ちなみに、「討論」「議論」は、ある事柄について意見を出し合つて議論をたたかわせることであり、相手を打ち負かすためのものという意味合いが強い。

これに対し、「対話」は相手を理解するためであったり、相手と共に何かを生み出すためのものであったりする。「議論」や「討論」が攻撃的、排他的であるとすれば、「対話」は受容的である。だから、ワールドカフェなどの「対話」系のワークショップなどでは、しばしば「相手の言うことを否定しない」というルールが課されることもある。

(3) 平成27年度 研究主題

確かな学力の向上を目指して ～教えて考えさせる授業を通して、**確かな基礎基本の知識・技能**を育てる～

本年度は、昨年度の反省を踏まえ、「基礎基本の知識・技能の育成」に重点を置き、研究を進めていきたいと考える。

本校の生徒の実態から考えると、この「教えて考えさせる授業」を通じて、目指すべきは、「基礎基本の力を身につけ、思考する力を育てること」である。

基礎基本の知識・技能とは決して「簡単なこと」を言うわけではない。基礎とは、その上に、たくさんの知識や技能を乗せていく礎のことである。初歩的ことが出来るようになったからといって、そのまま「基礎基本の力が身についた」とは言えないだろう。「できた」という根底には、そのものの「**本質**」を理解していることを包括していなければならない。本校の研究に関連して考えると、「**理解度評定**」による『説明できる』という段階の理解ではないだろうか。

また、思考とは、目の前の課題に対して、過去の経験や知識を活用し、課題を解決する

ための手段を何通りか思いつき、それらの方法を用い、試行錯誤を重ねながら、課題を解決する力のことである。

つまり、思考のためには、知識や経験が必要である。しかし、基礎・基本の力は、思考や判断、そして、表現のための道具として活用出来る段階まで高められていなければならない。ただ「覚えた」とか「できた」の段階ではなく、「説明できる」段階まで理解を高めることが大切である。

(4) 研究仮説

相互説明の場を効果的に設定することで、
基礎基本の知識・技能を確かなものに育てることができるだろう。

4 具体的な内容

高根中学校「校内研究」の流れの中で、「確かな基礎・基本の知識・技能の育成」を考えると以下の点が考えられる。

- (1) 相互説明（対話）による確かな基礎力の育成（説明すること・説明されることにより、曖昧さを認識し、曖昧さの解決を図ること）
- (2) 先行学習の発想を活かした家庭での学習課題の提示
- (3) 「教えて考えさせる授業」の習得の段階を強化する。
教えて考えさせる授業の教師による補説を含めた基礎基本の知識・技能の教授の工夫
- (4) 家庭学習の定着（教科による宿題、学年取り組みの週末課題…『復習』の推奨）と家庭との連携

(1) 関わって

相互説明の場を設定する。

小グループで、課題に対する自分の考えを説明する段階である。討論の場ではない。説明をすることで、自分自身の理解の確かさを確認する、および、他者の説明を聞くことで、自分自身の理解の変容を図る。基本的には、聞き手は、話し手の言葉を受容する事が大切だ。反論ではなく、分からない点があったら、聞く程度に抑える。

- ・ 2から3人のグループで課題について、説明し合う。
- ・ 好意的に説明者の話を聞き、分からない点を聞く。

(2) 関わって

次時の学習に関連した家庭（事前）学習の課題（先行学習）の提示

（授業で習得を目指す知識、技能＝次時の目標に関する事前学習）

- ・ 習得すべき知識を含んだ、教科書の例題を解答例を見ながら、数題解く。
- ・ 基本構文を数パターン書いてくる。
- ・ 習得すべき事柄を、IC機器を利用して事前に調べてくる。
- ・ 習得すべき言葉をノートに数回書いてくる。
- ・ 習得を目指す図や表、絵をかいてくる。
- ・ 習得すべき技能を獲得するために、気をつける点を書いてくる。
- ・ 授業前の休み時間を利用して、前述の留意点を実践してみる。

(3) 関わって

「教えて考えさせる授業」の習得の段階を強化する。

① 本時の学習オリエンテーションの実施

- ・ 本時の目標の明確な提示（目標とは…努力し、こうなりたいと目指す姿）
- ・ 学習方法の提示

- ・学習計画の提示

② 教師からの補説の工夫

基本的には「生徒の理解」に揺さぶりをかける段階の指導である。学習内容の習得の本質に関わることを考える段階と言ってもよいかもしれない。

- ・その知識・技能を習得するための根底にある内容の説明
- ・その知識・技能を習得するための手順の説明
- ・その知識・技能を習得するためのポイントに関する説明

(4) 関わって

- ① 「教えて考えさせる授業」の先行学習に限らずに、各教科、および休業日前の宿題、課題を提示し、**家庭学習の習慣の定着、および、質・量の向上を目指す。**
- ② 学級通信、学年通信および、学年によっては学習担当による通信等を用いて、**の取り組み内容を家庭に向けて発信する。**(家庭との連携)

5、研究計画

(1) 1学期の研究計画

高根中の生徒の実態に即した「教えて考えさせる」授業の確立を目指して、前述の流れのある授業研究を、本年度の研究主題を考慮し行う。

- 5月 理論研究(研究方針、主題、計画、内容、方法の共有化)
- 6月 指導主事を招聘しての授業提案①(国語)
- 7月 1学期の研究のまとめと「教科部科会」
- 8月 「学習会」「教科部会」

(2) 2学期の研究計画

1学期の研究を受け、「教えて考えさせる授業」を展開することで、生徒の「確かな基礎・基本の知識・技能」の育成を図る。

- 9月 「教えて考えさせる授業」の指導案の形式の検討
10月 提案授業の指導案検討
- 10月 指導主事を招聘しての授業提案②
- 11月 指導主事を招聘しての授業提案③
- 12月 教科ごとの実践報告①、2学期の研究のまとめ

(3) 3学期の研究計画

研究のまとめ

- 1月 教科ごとの実践報告②、研究の成果と課題の明確化
- 2月 教科ごとの実践報告③、研究紀要の作成について
- 3月 平成27年度の研究のまとめと平成28年度の研究の方向性について検討

6 研究組織

- (1) 研究推進委員会
- (2) 校内全体研究会(月例研究会)
- (3) 教科分科会
 - ① 国語科・美術科部会
 - ② 社会科部会
 - ③ 数学科部会
 - ④ 理科部会
 - ⑤ 英語科部会
 - ⑥ 保健体育・音楽科会

